

# 第7回平和市長会議総会 全体会議Ⅱ

—2020年までの核兵器廃絶を目指して—

2009年8月10日(月) 13:00~14:30  
長崎ブリックホール国際会議場

チェアパーソン	ドナルド・L・プラスケリック (アクロン市長・アメリカ)
発 言 者	ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド)
	ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)
	リュック・デハネ (イーペル市長・ベルギー)
	トム・コクラン (全米市長会議事務局長)
	ジョセフ・アンティガス (グラノラズ市長・スペイン)
	アラン・ルイ (ヴィレジュイフ市議会議員・フランス)
	ドミニク・イターフ (ヴィトリー・スールセヌ市副市長・フランス)
	ムセ・ハイル (ブルンジ共和国大使・ブルンジ)
	マイラ・ゴメス (核軍縮・核不拡散議員連盟 (PNND) 上級プログラムオフィサー・ニュージーランド)

## 開会

### 議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：

全体会議Ⅱを始めます。主催者の長崎市長、すべての参加市長、皆様、心より歓迎申し上げます。

この会議には4つのセッションがありますが、1時間半しかありませんので、できるだけ簡単にお話しいただくようお願いいたします。まず、全体会議Ⅰ、分科会Ⅰ、分科会Ⅱの報告をしていただきます。

### 議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：

全体会議Ⅰの議長を務めていただきましたニュージーランドのワイタケレ市のハーヴェイ市長から報告していただきます。

## 全体会議Ⅰの報告

### ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：

皆様、こんにちは。私は、土曜日の全体会議Ⅰの議長を務めさせていただきました。「市民と都市が国を動かすー世界的なパラダイムシフトを目指してー」というテーマで、満席の中、素晴らしい発言者をお迎えすることができました。平和と安全保障は国家の問題と思われていますが、しかし、戦争が起ると攻撃を受けるのは都市なのです。そこで、われわれは、このテーマを選びました。

発言者の方々は、明確で情熱にあふれた話をされ、われわれが持っている責務は、市民の生命と安寧を守ることであるというお話をいただきました。会議では参加者の知恵を集めて話をしたのですが、時間が非常に限られていました。

長崎市長とフィレンツェ市議会議員から歴史的にたいへん広大なお話をいただき、イタリアの都市が長年にわたって長崎との関係を持っているということをお話しになりました。多くの発言者の都市は、日本、広島市、長崎市と関わる長い歴史を持っています。

また、新しい声を聞くこともできました。ハラブジャ市のキダー・カリーム市長は、マスタードガス攻撃を受けたこと、約20年前のクルド人の悲劇など、彼の経験した悲劇について話され、われわれに対して訴えられました。

ハノーバー市のステファン・ヴァイル市長からは、ドイツでは、平和への動きが非常に進捗しており、核の脅威に対抗しようとしているというお話をいただきました。

日本のお二人の市長から、エネルギーと情熱と知恵をもって、日本では、広島・長崎のみならず、ほかの都市でも平和への大きな声が起こっているというお話を伺い、非常に嬉しく思いました。

最後に、英国・アイルランド非核自治体協会のジョージ・レーガン氏の素晴らしいお話

を聴くことができました。イギリス、スコットランド、アイルランドなどが平和に対してどのような熱意を持っているかというお話をしていただきました。

全体会議 I はここまでです。(時間の都合で予定していた発言ができなかった発言者について)後は議長にお任せしますので、お願いいたします。どうもありがとうございました。

**議長 (ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ) :**

非常に簡潔にまとめて下さってありがとうございます。

## **分科会 I の報告**

**議長 (ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ) :**

ハノーバー市のステファン・ヴァイル市長は、急用がありまして、早くお帰りになりましたので、私が代読します。

(議長代読) ハノーバー市のヴァイル市長が 2 時に分科会 I の開会を宣言し、現在の世界的な問題に対して、どういうふうに取り組むかという話をし、冒頭、内田伯さんの爆証言を聴きました。

内田さんは、当時、中学 3 年生で、軍事工場に動員され、その時の原爆の体験を生々しく語って下さいました。家に居たら死んでいたであろうこと、自宅は爆心地から数十メートルしか離れていなかったこと、最後の父親との思い出は喧嘩でありとても残念だったということ、父親は骨しか見つからなかったということなどをお話しになりました。内田さんは、戦争、爆撃、恐ろしい苦しみは、戦争中の、天皇は現人神であるという思想に基づいている、もっと考え、批判すればよかった、ともお話しになりました。そして、政治的なプロパガンダではなく、自分が戦争を語り継ぐことは一つの使命であると言われました。

ヴァイル議長は、日本とドイツの戦争体験者は高齢化しているという話をされました。

その次に、ジャン・ジョエル・レマシャンさんが発言され、内田さんの証言は素晴らしいと言われました。そして、地元のフランスの小さな町でも市民は戦争や核兵器を非常に恐れており、都市は市民と共に戦争に対する取組みをしていかなければならないとお話しになりました。

次に、札幌市の中田副市長がお話しになり、札幌市では子どもたちに対する平和教育を熱心に進めているということでした。また、2008 年 7 月の G8 サミットの開催時に広島・長崎原爆展を開いたところ、各国首脳は訪問されなかったものの、各国大使や高官らは訪問されました。多くの市民から、自分の国でこんな悲惨なことがあったことを知らなかったことにショックを受けたという反応があったそうです。札幌市は、これからも同じような原爆展を開催していくというお話がありました。中田副市長は、広島市・長崎市に対し

て、平和への努力を続けていることに感謝し、他の都市に対して、この二つの都市だけに任せることはできない、平和のメッセージを是非世界中の子どもたちに伝えなければならない、と言われました。

フランスのマラコフ市の美帆・シボさんは、27年間、フランスで原爆体験を語り継いでおられるということですが、フランスは核兵器保有国ですので、そういうことを語るのはとても難しいということです。例えば、原爆投下のために戦争が早く終わったとか、日本は南京虐殺をしたではないか、長崎でそんなことがあったとは全然知らなかった、というような反応があるそうです。

フランスは核実験を繰り返すことにより被曝者を生んできました。そして、マラコフ市では9月21日の国際平和デーから始まる核廃絶週間に向けて準備をされているということです。

ワイタケレ市のハーヴェイ市長は、最初にマオリ語で挨拶されたので、ここは通訳できなかったようです。

内田さんの話は本当に力があり、こうした体験を現代の子どもたちに伝えることの重要性を強調されました。そして、共感のルーツというプログラムを紹介して下さいました。生まれて1カ月の赤ちゃんが学校を訪問し、さらに3カ月後、6カ月後、9カ月後に赤ちゃんが訪れることにより、子どもたちが一人ひとりの命の大切さを学ぶというプログラムです。

また、広島と長崎の平和の炎をニュージーランドに持ち帰り、10月2日から平和の行進を始めるとのことです。平和行進がそれぞれの国に来た時には参加して欲しいと言われました。

最後に、エリトリアのエスティファノス・アフォルキ・ハイレ駐日大使が、アスマラ市長とマッサワ市長の代理としても発言されました。

平和市長会議に対する支持と連帯を表明され、大使自身も被曝者であるという衝撃的なお話をされました。大使が子どもの頃、サハラ砂漠ではフランスが17回も核実験をして、多くの人たちが非常に奇妙な病気を発症し、ひどい疲労感に悩まされたということです。当時は原因不明でしたが、今では皆、放射能の影響だと知っています。放射能に汚染された風雨が奥地まで運ばれていたそうで、アフリカ大陸は奴隷制度や植民地化、更に代理戦争の苦しみを受けましたが、核実験による被曝の被害も大きいという話がありました。

マッサワ市は、1990年にはソ連による空爆があったそうです。2008年10月に広島・長崎の被爆者がマッサワ市を訪れ、それをきっかけにマッサワ市は平和市長会議に参加したということです。マッサワ市長自身もソ連による1990年の空爆を体験しています。

## 分科会Ⅱの報告

### 議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：

イーペル市のデハネ市長に分科会Ⅱの報告をお願いしたいと思います。

### リュック・デハネ（イーペル市長・ベルギー）：

私は、英語が母国語ではないので、報告も短くなるかもしれません。

昨日の午後行われた分科会Ⅱの後半の部分からご紹介したいと思います。ここでは、2020 ビジョンキャンペーンの各国の取組みが紹介されました。フランスはシボ事務総長からマラコフ市の事例の紹介があり、また、ソニア・ギュニン副市長からヴィトリー・スールセーヌ市の事例の報告もありました。イギリスはマンチェスター市の事例がショーン・モリス主席政務調査官から報告され、ベルギーはイーペル市の事例がポール・デュイベッテルさんから紹介されました。それと同時に、各国や地域の政治的な状況の紹介もありました。また、アーロン・トビッシュさんから歴史的観点からの報告があり、2020 ビジョンキャンペーンの背景説明がなされました。それから、今回の会議にはバングラデシュから13の都市の市長が参加し、分科会Ⅱの終わりに、この13都市の加盟申請書が秋葉市長に手渡され、今後同国から100の都市が平和市長会議に加盟するよう呼びかけるという報告がありました。

分科会Ⅱの前半では、国際基督教大学の国際法専門の最上敏樹教授による講演がありました。その中から3点について申し上げます。

1点目は、NGOの力は非常に大きいということです。イタリアでのソルフェリーノの戦いから今では世界的に知られる赤十字が活動を始めたという事例を紹介され、平和市長会議も赤十字のように活動を強化できるという希望を与えられました。

2点目は、核兵器先制不使用の問題、広島、長崎とアウシュビッツの類似性が紹介され、核兵器の保有及び使用は、国際法違反であるというコメントがありました。

3点目は、現在は歴史の中で重要な時期にあるということです。今、経済危機、金融危機に直面していますが、それはチャンスと見ることもできるというコメントでした。つまり、こうした機会を活用することで望みが出てくるということで、いくつかの事例が紹介されました。一つは、21世紀は、国家あるいは政府の時代ではなく、都市と市民の時代であり、意思決定が都市や市民の手で行われる頻度が増えてくるという内容です。二つ目は、オバマ大統領の演説によって、2020 ビジョンキャンペーンの目標達成の望みが増してきたので、オバマ政権や他の世界のリーダーとともに、その波を起こしていこうということです。

結論として、平和市長会議には、その力を駆使し、2020年までに核兵器廃絶を達成しなければならないという非常に大きな責務があるということです。また、核兵器のない世界を実現して2020年に広島・長崎でオリンピックを開きたいということです。そのような理

由から、われわれにはたいへん多くの仕事が残っており、明日からまた始めていきたいと思いをします。

**議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：**

デハネ市長、ありがとうございました。

### **参加者の発言**

**議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：**

ただいまから発言者を迎え、この会議とわれわれの活動に関する発言をお願いいたします。

まず、全米市長会議事務局長のトム・コ克蘭さんをお願いいたします。トム・コ克蘭さんは私の友人で、30年間の経験を生かして、3万以上の人口を持つ都市から成る全米市長会議を率いておられます。前回の年次総会では秋葉市長を招聘し、お話しいただきました。全米市長会議と平和市長会議の連携を強調されています。

では、コ克蘭さん、お願いいたします。

**トム・コ克蘭（全米市長会議事務局長）：**

長崎に来て本当にうれしいという言葉から始めたいと思います。われわれの国では、歴史的にポップカルチャーや映画では広島のことばかり話されます。私は、罪のない人々が亡くなったこの地に来るのは初めてで、この地で主催していただきまして、本当にありがとうございます。

全米市長会議は、40年間もの間、広島市の市長らと交流を行ってきました。非常に活動的に、平和記念式典に初めて代表団を送って以来、毎年代表を送っています。被爆60周年の際にも参加しました。われわれ代表団としては、アメリカの市長たちが前線に立って平和活動をしていることを認識していただきたいのです。1970年、ベトナムから撤退するようにニクソン大統領に訴えましたが、それは本当に政治的な力となりました。それまで市長は、ゴミを収集して、道路を舗装しなさい、というようなことしか言わなかったのですが、そのときは全米市長会議の決議をもって国際関係にも関わり全国的な力を発揮したのです。

ここで色々なお話を聴き、素晴らしいと思いますが、必要な場合には政治活動にも入っていかなければならないと思います。われわれは、オバマ大統領に希望と変化を求めています。ただ希望だけでは駄目で、変化を起こさなければなりません。プラハで演説したオバマ大統領を応援して、強くしなければなりません。他の多くの国も同じだと思いますが、アメリカでは大統領が署名することによって条約が発効するのではなく、上院で承認されなくてはならないのです。

われわれは、アメリカ国内と同様に日本の全国市長会、ヨーロッパの市長団体「ユーロシティ」、世界の大都市の会議「メトロポリス」、アルゼンチン市長会といった各国の全国的な市長団体と連携を深めています。

気候変動に関しては、アメリカ合衆国政府は、京都議定書を批准していませんが、141名の市長が、2005年米国市長気候変動保護協定に署名しており、現在、950の都市がコペンハーゲンに向けて、気候変動から地球を守らなければならないという声を上げています。世界の色々な所で環境の活動が見られます。

私は、核軍縮の問題と環境の問題はリンクすると思っています。アメリカもそうですが、市民は環境の問題に積極的に取り組んでいます。そこで、われわれは、環境のことをやるなら核軍縮の話もしましょう、と言うのです。

それで、ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長や秋葉市長と共に世界の各組織を回ってお話ししています。大統領、首相、元首は色々な喫緊の課題を抱えていますので、市長が地域レベルで立ち上がり、他の市長にも、立ち上がろうと呼び掛けなければなりません。

核の問題はとても慎重を要する問題です。われわれの世代ではケネディ大統領の暗殺に最も精神的ショックを受けました。私の子どもは、9.11の同時テロに最も精神的ショックを受けたことでしょう。われわれにとっては、飛行機から原爆が落とされることが記憶の中にありますが、黒いアタッシュケースに入った核が使われる可能性があることも知らなければなりません。われわれがここで再びテロの脅威の問題を話すとき、世界中の地下鉄でもテロの脅威の問題があること、ロンドンの地下鉄で核兵器が使われる脅威があることを認識しなければなりません。

全米市長会議は75年の歴史を持っていますが、その中では戦略的な政治活動の話を集中して行うようになっていきます。私は、東京で全国市長会の方々と来週会うのですが、こういった日本の組織や他の国の同様の組織とも連携、協力すると共に、ここでの会議の内容を共有し、草の根のNGOの方々と一緒に、平和と軍縮に向けて取り組んでいきます。

だから、市長が立ち上がらなければならないのです。議会や連邦の人たちは国民に近くないので、市長こそが世界を変えていくことができるのです。人類の行動、考え方を変えていかなければなりません。気候変動のことでもそうですし、乳癌や前立腺癌などの撲滅についてもわれわれが活動しているのです。国民の考え方、行動を変えることができるのは市長です。この運動の中で世界を席卷し、他の市長、国、市民を動員することができると思うのです。こうした活動に、プラスケリック市長や全米市長会議会長を務めるシアトルのニケルズ市長とともに取り組んでいます。皆様と協力して前進していけるのを楽しみにしています。プラスケリック市長、ありがとうございます。(拍手)

**議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：**

ありがとうございました。

次は、スペインのグラノラーズ市のジョセフ・マヨラル・アンティガス市長です。昨日は夜遅くまでアピールの起草に携わっていらっしゃいました。本当にありがとうございました。

**ジョセフ・マヨラル・アンティガス（グラノラーズ市長・スペイン）：**

まずお礼を申し上げたいと思います。広島市長、長崎市長、ありがとうございます。本当に力強く平和のために戦って下さっています。われわれは本当に感動しています。広島・長崎の滞在は短いのですが、皆様の歓待にたいへん感激しています。

私の都市、グラノラーズの話をしたいと思います。グラノラーズには、平和教育のためになる色々な記憶があります。グラノラーズは、人口6万人で、バルセロナから25キロ北に行ったところにあります。世界中からたくさんの人を受け入れる大変開けた町で、色々な活動が市民によって行われています。グラノラーズは、都市がたどった過去を非常に誇りに思っています。われわれの中では歴史の交差点のようなものです。

グラノラーズは、2世紀にローマ人によって町が造られ、以来、大変困難な時代がたびたびありました。最も悲劇的なことは、スペイン内戦における攻撃です。1938年5月31日、フランコ将軍を支援するイタリアの飛行機5機が60発の砲弾と750発の爆弾を積んでグラノラーズを攻撃し、主に女性と子どもの224人が命を失い、多数の負傷者が出ました。こういった爆撃の記憶が都市の歴史に刻み込まれ、人々の中にも残っています。独裁体制の暗闇の時代には、その記憶を語ることを禁じられた時代も何度かありました。このような出来事は二度とあってはいけないと思うのです。

ということで、われわれは、平和について非常に深く考えています。調和と対話の時代にあって、われわれの都市は紛争や戦争の防止のための調査研究に関する活動ができると思っています。

スペインでは多くの研究の結果、暗闇に葬られていた歴史が明るみに出され、大きな前進がありました。内戦の記憶が呼び起こされ、歴史家、哲学者、研究者が多くの作業をして、生き残った人たちの記憶を聞いています。市民も参加し、小説もそうですが、多くの記録も出版されるようになっていきます。そういったことのために現在のわれわれの都市があると言えます。

われわれは、過去を思い出すだけでなく、もっと前向きに行動し、民主的な都市としてもっと前進しなければならないと思います。そして、平和のために戦わなければなりません。もちろんわれわれの都市は、平和構築のために戦っています。爆撃を受けた都市は、義務として、他の人たちに自分たちのつらい経験を語り続けることが必要です。われわれは、民主主義の世界において「平和文化」構築のために活動をしなければなりません、そのためには様々な都市の記憶を結びつけなければなりません。

われわれは、毎年5月31日を爆撃の記念日として、民間人に対する攻撃が二度と起こってはいけないと願っています。2008年5月、われわれは平和祈念のため、グラノラズ平和センターを造りました。そこでは対話と経験の交換が行われ、市民と一緒に平和活動をしていきます。そして、市民からあらゆる種類の記憶を収集したいと考えています。

グラノラズ平和センターには、様々な機能があります。一つ目は、爆撃の体験者の証言を聞き、二つ目は過去に対する研究を推進することです。三つ目は、若い人へ平和教育を推進することです。そのため、若い人と爆撃の体験者との交流が大変重要です。多様性を尊重し、市民がお互いに助け合い、協調して、市民権の意識を拡大していくことです。平和構築という同じ目的を持ったプロジェクトにおいて、ほかの都市と協力していきます。

われわれには平和構築という明確な目的があり、われわれの地方議会も賛成しています。そして、他の都市とネットワークを組み、平和構築のために戦っていこうと思っています。

どうしたら一緒に行動ができるのでしょうか。どうしたら平和構築の役割が果たせるのでしょうか。それぞれの都市が自分たちを知り、他の都市を知り、一緒になって行動することが一つの方法だと思います。そして、都市の中で紛争があったら、このような形で解決していかなければならないと思っています。

グラノラズ市ではどのようなことが行われているかということですが、一つ目は、過去の歴史をもう一度明らかにし、新しい将来を作っていくことです。二つ目は、我々のルーツを探っていくことです。三つ目は、過去の記憶を、日々の生活を向上させるために生かしていくことです。四つ目は、若い人たちに、国際的に何が起きているか、われわれの過去に何があったかということのを正しく伝え、若者はより良い将来のためになすべきことを考えていくことです。五つ目は、国際平和デーに参加し、他の人たちと対話していくことです。六つ目は、地域の体験を世界中に広めて、世界中の人たちとネットワークを作り協働していくことです。

更に、私は、ネットワークをスペイン国内でもっと発展させたいと思います。11月には、地中海に向けてネットワークを広げて、まず地中海に平和を構築していきたいと思います。そして、平和市長会議とさらに協力を強め、爆撃による傷跡を皆で正しく認識し、新しい世代に過去にあったことを伝え、正しい批判の目を育てていきたいと思っています。われわれは、日々、市民参加の活動を続けていきたいと思っています。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

**議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：**

ありがとうございました。

次は、フランスのヴィレジュイフ市の市会議員代表、アラン・ルイさんをお願いいたします。

### **アラン・ルイ（ヴィレジュイフ市市会議員代表・フランス）**

長崎市長、世界の同僚の皆様、ヴィレジュイフ市は、パリの南にある、人口5万人の平和な町です。われわれは、4年前に広島を訪れており、帰国してから核軍縮のための行動を大きく増強できたと思っています。正にこうして皆様と出会い、話し合うことで勇気を得て、われわれの活動は更に強くなって、協働による力を発揮することができるのだと考えています。

今年も帰国してから、9月21日の国際平和デーには、ヴィレジュイフ市も他の都市と一緒に記念事業を行います。その時、市は各家々の窓に平和の旗を掲げるよう求めます。我々は来年5月のNPTの情報を市民に普及させるため、またNPT会議に圧力をかけるため、ヴィレジュイフ市の議員と市民が公式にNPTについての討論を行います。

このような住民の生命に関わる問題について、地方の議会が発言をしていくことは大切なことだと思いますが、こうした活動が4年間で拡大しています。地方の議会や都市が力を持つことで、色々な国際機関に対して働きかけができるのだと思います。国連事務総長からの、また、広島市長や長崎市長からの呼びかけがわれわれに良く伝わっており、それに対する反応として、地方の議会や都市が市民の声を届け、それが国際社会で反映されるのです。地方議会の議員が色々な団体と提携し、世論形成の機会を作ることは不可欠だと思います。

平和市長会議は、こういった市民の意識を高めるという意味で大切だと考えています。平和市長会議のそれぞれの市長は、少なくとも隣の都市の市長に対して、平和市長会議への加盟を呼びかける必要があります。最低限一つの都市の加盟で、われわれの行動の力は更に増すと思います。われわれは、ヴィレジュイフ市の近隣自治体に働きかけております。

われわれは、2009年は大変に重要な年であると考えています。平和市長会議のネットワークにおいて協働のイニシアティブを発揮することにより、われわれ市長は、より市民に近づき、市民の意識を高めていくことができると思います。

ご清聴、ありがとうございました。（拍手）

### **議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：**

ありがとうございました。

次は、フランスのヴィトリー・スールセーヌ市のドミニク・イターフさんをお願いいたします。

### **ドミニク・イターフ（ヴィトリー・スールセーヌ副市長・フランス）：**

皆様、こんにちは。私は、今回もまた平和市長会議に参加でき、長崎にいることをたいへんうれしく思います。ヴィトリー市はパリ近郊にあり、長年に亘り、市長の後押しで、平和に向けた活動を行っています。ヴィトリー市は、ここに参加されている都市と同じように、他の都市と色々な協力活動をしています。核兵器廃絶の世論喚起のほか、活発な協

力活動や同盟に参画しています。

議員としてのわれわれの力は、われわれの公約に投票してくれた何百万という市民の意を汲むためであり、人類というものがわれわれの活動の核になります。「都市を攻撃目標にするな」という広島市長の訴えこそ、われわれの市長と議員の責任です。都市を攻撃目標にさせてはなりません。核兵器はその目標を都市に定めており、その例が広島・長崎です。

戦争や様々な緊張関係で地球の均衡が崩れます。地球が、戦争や緊張関係が引き起こす不均衡の増大と大規模な危険へと向かうことを容認することはできません。最も貧しい人々が犠牲になり、核兵器が国や人々を守ることはないのです。富のない国々でも核兵器を配備していますが、兵器も壁も安全を守るものではありません。抑止力は単なる言い訳にすぎません。脅威があればあるほど、人間は他の国に対して脅威を与えます。

われわれとしては、政府に対して圧力をかけていかなければなりません。フランスも本当にそうしなければならぬのです。そして、市民が大きな力になっていく必要があります。男性も女性も全ての住民がその圧力をかけるべきです。われわれは核を持っているという責任があるので、地球上から核の脅威を取り除かなければなりません。われわれは、もちろん原子力の大きな恩恵を受けていますが、やはり、われわれの世代は核のない世界を目指さなければなりません。これこそが国際法に対応するものであり、だからこそ、われわれは政府に圧力をかけていくのです。

軍備は国の責任の問題でもあり、また、軍備に充てられる何十億ドルというお金の30%を費やせば貧困問題が解決します。軍備への投資を、本当に支援のお金を必要としているユニセフや人道支援に使ってほしいと思います。

われわれは、市民主導の取組を更に推進し、核兵器廃絶に対する努力を重ねていく必要があります。ヴィトリー・スールセヌ市は、昔からこういった活動に携わっていますし、子どもたちが核の脅威から逃れ、平和に生きていくことができるように活動しています。

今回、平和市長会議総会に参加して、フランス平和自治体協会や、色々な組織、地方が努力して、もっと多くの自治体が加盟するようになりたいと思います。

そのために「オバマジョリティー」を柱にできればと思います。アメリカは道義的責任を認め、核兵器廃絶に対処すると言ったわけです。こういったものがなくなれば、世界中で紛争がより少なくなるだろうと思います。(拍手)

**議長（ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ）：**

ありがとうございました。

次は、ブルンジ共和国のムセ・ハイル大使閣下をお願いいたします。

**ムセ・ハイル（アフリカ宗教連合イニシアティブ（URI）理事長・ブルンジ共和国大使）：**

理事の皆様、私からの言葉を申し上げる前に、被爆者の皆様、広島・長崎で犠牲になられた方々、世界でそのような戦災を受けた方々に対して、是非黙禱を一緒にお願ひいたし

ます。犠牲者の御霊が天国で静かにお眠りになりますように。

大使、各市長、平和市長会議参加者の皆様、活動家の皆様、ご参会の皆様、平和のメッセージを私から皆様にお伝えしたいと思います。本日、皆様と共に第7回平和市長会議総会に参加でき、ご挨拶ができますことを大変誇りに思っております。また、この機会を得まして、この会議の組織委員会の方、広島市長、長崎市長、ご招聘いただき、おもてなしいただいておりますことを感謝申し上げます。私は、アフリカ宗教連合イニシアティブの理事長を務めておりますが、この感謝の気持ちを、ここにいるすべての皆様、平和を信じる世界の人々に捧げます。また、ANT-Hiroshima 代表の渡部朋子様とボランティアの皆様、心から感謝申し上げます。平和文化、国際協力の推進のため、「ヒロシマ・ナガサキ議定書」の採択のために活動されていることを讃えたいと思います。

この8月の会議において、皆様にブルンジ共和国のピエール・ンクルンジザ大統領に代わり、また個人的にも、皆様方のご健勝を讃え、平和市長会議と広島平和文化センターの素晴らしい活動を讃えたいと思います。

皆様と一緒に国際世論を喚起し、軍備縮小と核廃絶のために活動し、恒久平和をつくり出すことを支持するものです。また2020ビジョンキャンペーンも強く支持します。2010年から2020年を国連の「軍縮の10年」にすることが決定しています。秋葉市長が仰ったように、このキャンペーンは「軍縮の10年」にとって非常に重要なことで、これを支持する必要があります。また、うれしいことに国連は今年の国際平和デーにおいて「軍縮」に焦点を当て、「軍縮を、そして平和を」というメッセージで、核兵器のない世界に向けて行動しようというテーマを掲げています。私のような個人が核兵器のない世界に向けて行動することができるのです。

更なる希望として、この会議の中でも何度も言及されましたが、アメリカのオバマ大統領が核廃絶に向けて具体的な対策を立てると言われました。

また、秋葉市長は、世界の市民や市長に対し、国連のイニシアティブに参加するように、核兵器のない世界を創り一般の人々の注目を集めるように、という明確な素晴らしいメッセージを発信されました。そのことにお祝い申し上げます。皆様、是非9月21日の国際平和デーを重視し、特に市長が国連平和の日を宣言しましょう。

大使、市長、友人の皆様、ご存知のとおり、われわれが住んでいる世界は重大な局面に直面します。われわれは、自分の未来を選ばなければならない分岐点にきています。われわれの世界を根底から覆してしまうような危機に直面しています。例えば、世界規模の経済危機、気候変動、価値観の低下、核戦争の脅威、倫理観の欠如などです。また、失業、貧困、飢餓、人種差別、民族・宗教紛争、薬物乱用、組織犯罪、汚職、その他の負の要因が世界各地にはびこっています。

平和とは戦争がないということだけではなく、それは社会正義の実現です。人間の安全保障がなくなってしまうことが戦争なのです。われわれが直面している危機は、特定の国や地域だけの問題ではなく、全ての人類の問題であることを心に刻み、核廃絶、戦争をな

くすと訴え続けなければなりません。この声を全ての人々に届けることが必要なのです。平和市長会議はそのための枠組を確立できると思います。

この世界的な問題を解決するためには、世界的な解決法が必要で、われわれ一人ひとりが参画することが必要なのです。自分自身が行動を起こすことによって、その解決法の一部となることができます。われわれは、言葉だけに終わるのではなく、今、行動にシフトするときです。それによって世界を変えることができます。一人ひとりが本分を尽くせば、われわれの共通の夢を実現することができます。全人類が自然とその他の生物と調和して暮らすことができる、より良い平和な世界づくりをするのです。

この惑星の住民であるわれわれにとって、今こそ自分自身を全生物、母なる地球と結びつけて、普遍的責任感をもって生きるべきなのです。われわれ一人ひとりが地球上の全生命の現在及び将来の幸福に対する責任を共有しています。文化、宗教、民族、人種の膨大な多様性の中、われわれは、共通の運命を持つ人類の一部であることを認識しなくてはなりません。

長崎市長が、「今、私たち人間の前には二つの道があります。一つは、「核兵器のない世界」への道であり、もう一つは、64年前の広島と長崎の破壊を繰り返す滅亡の道です」と仰いました。われわれの世界は常に変化しており、この変化する世界の中で今のままでいることはできません。また、過去の状態に戻ることもできません。われわれは前進あるのみです。同じ道を行ってはなりません。戦争、紛争、暴力、飢餓、差別、貧困、不敬、憎しみといった道をたどるではありません。危機と紛争の中での暮らしを続けるべきではありません。

長崎の永井博士は、「常に寛大な心を持ち、いつも心を開き、常に和解の道を模索することが必要である。時には目が見えなくなることもある。しかし、お互いに寛大な心を持ち、和解の心を持つことが必要だ」と仰っています。

平和の道こそがわれわれがとるべき道です。戦争から平和へ、殺戮から共存へ、不敬から互いの尊敬へ、憎しみから愛へ、絶望から希望へ、暗闇から光へ、利己的であることから利他的な生き方へ、復讐から許しへと導く道が必要なのです。

そして、そのためには黄金律が必要です。黄金律とは、「自分がそうして欲しいと思う態度で相手に接すること」という普遍的な理念です。黄金律のメッセージは簡潔で、普遍的で、強力で、人類の歴史の中で最も広く行き渡った普遍的な道義です。これは、多くの宗教、伝統、土着文化、世俗的倫理において、人生の根本的原理、そして世界倫理の基盤に築かれている基礎として認められています。様々な世界の文化に根ざす黄金律は、紛争の解決において様々な文化が持ち出すことができる基準に適しています。世界がますます互いに影響しあう一体化した地球社会になるにつれ、そのような共通基準を打ち立てることは急を要します。

尊敬すべき市長、友人の皆様、アフリカの30カ国の129都市が平和市長会議のメンバーであると認識しています。ご存知のとおり、アフリカには54カ国ありますので、他の24

カ国と数多くの都市は、まだ平和市長会議のメンバーではないのです。これらの都市もこの組織に加わる必要があります。平和市長会議をアフリカ全域にわたる非常に活発な運動にする必要があります。また、平和市長会議がアフリカ連合と緊密に協力することも非常に重要です。アフリカ連合は、このイニシアティブを支持してくれると確信しています。

そこで、是非事務局の方々にお願いしたいのです。アフリカ平和市長会議というテーマの下に、アフリカ連合と提携し、会議を計画して下さい。アフリカの首脳からの政治的好意を受けるために、アフリカ連合に平和市長会議が代表を送ることもよろしいのではないかと考えます。平和市長会議会長の秋葉市長たちとこのことはお話ししましたが、アフリカ連合とアフリカの関係諸団体にこの件を検討するよう伝え、皆様と協力しあってお互いの夢を実現したいと考えています。

1947年の選挙で当選された濱井信三市長の、「広島をして世界平和を願う人々のメッカにする」という言葉が現実になったのです。それは長崎の場合にも当てはまります。平和市長会議の設立は、その証拠です。

平和宣言を読み上げる際、濱井市長はこのように言われました。「この恐るべき兵器は、恒久平和の必然性と真実性を確認せしめる『思想革命』を招来せしめた。すなわち、これによって原子力をもって争う世界戦争は人類の破滅と文明の終末を意味するという真実を世界の人々に明白に認識せしめたからである。これこそ絶対平和の創造であり、新しい人生と世界の誕生を物語るものでなくてはならない」。

世界に平和が広まりますように。世界のいかなる場所においても同じことを起こしてはなりません。ヒロシマとナガサキを繰り返してはいけません。ルワンダのジェノサイドのようなことを二度と起こしてはなりません。世界の全市民に、核兵器を廃絶し、世界に持続可能な平和と正義をつくり出すために協力することを求めます。

世界に平和が広まりますように。われわれの心に平和が広まりますように。われわれの家族に平和が広まりますように。われわれの都市に平和が広まりますように。そして、この地球に平和が広まりますように。

ありがとうございました。(拍手)

**議長 (ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ) :**

ありがとうございました。

次は、PNND (核軍縮・核不拡散議員連盟) の上級プログラムオフィサー、マイラ・ゴメスさんをお願いいたします。

**マイラ・ゴメス (PNND 上級プログラムオフィサー・ニュージーランド) :**

平和市長会議の皆様、秋葉市長、田上市長、長崎の皆様、ご来賓の皆様、世界から参加された皆様、ニュージーランド (マオリ語でアオテアロア) と、私が生まれたポリビアのラ・パス (平和の意) からご挨拶申し上げます。私は、PNND (核軍縮・核不拡散議員連盟)

で上級プログラムオフィサーをしています。

私は、今回は初めてアジアに来ました。日本に来たのも長崎に来たのも初めてですので、とてもうれしく思っています。他の方も仰いましたが、今回はまたとない機会になりました。64年前に起こったことを繰り返してはならないという思いを新たにしました。しかし、世界中に危険な核兵器があり、それは今も起こる可能性があります。平和市長会議という平和の戦士の会合に参加できて、たいへん光栄に思っています。核による破壊の脅威は、母なる大地、父なる大空のいずれにおいても受け入れられるものではありません。

PNND は、現在、75 カ国、600 人の議員が参加しています。議員は、世界中で選挙によって選ばれ、市民社会と政府をつなぐ存在です。つまり、税金をどのように使うのかを決定するのです。ですから、議員たちに責任ある仕事をさせるかどうかは、われわれの選択になります。すなわち、資源を軍縮のために使うのか、あるいはごく少数の人の金銭的メリットのために軍力を維持することに使うのか、それを決めるのはわれわれの選択なのです。

また、議員には監督権限があり、それは、政府が公約を守るのか、あるいは破棄するのかを明らかにします。正義をもって既存の条約を守らせることができますし、もし守らない場合には警告を発することもできます。ですから、われわれは市民として情報を得るとともに彼らと一緒に行動していかなければならないと思います。

PNND のメンバーも議員と地元の人たちとの間の橋渡し役をすることができます。また、平和市長会議とも特別な関係を醸成することができます。そこには共同行動とか、互いの組織を助け合うことも含まれます。

核兵器のない世界のための市長と議員の共同宣言が出されましたが、世界中の市長と議会が共に署名したものであり、2006 年 10 月に国連総会に提出されました。これは、市長と議員が代表する人々の命を脅かすような核兵器を許してはならないという気持ちの現れであり、核兵器のない世界を目指すビジョンが表明されました。それは、核軍縮の交渉を開始する一つの戦略となるでしょう。

核兵器のない世界を実現するための主要な戦略は、核兵器禁止条約 (NWC) に向けた交渉を促進することであり、国際的に厳しく核兵器を規制していくことです。今、2020 ビジョンが平和市長会議で進められていますけれども、これは非常に大きな意味を持っています。同じように、昨年、欧州議会の超党派の PNND のメンバーが欧州議会として核兵器禁止条約を支持することを提唱しており、平和市長会議と PNND のメンバーが、各国の国会や市長の会合、NPT 再検討会議や準備委員会、国連総会などを含め、国レベル、国際レベルで核兵器禁止条約の提案を幅広く促進していくということです。

欧州議会は一つの決議を採択しました。欧州理事会において核兵器禁止条約と「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を支持するというものであり、2020 年までに核兵器廃絶を目指そうというものです。

平和市長会議と PNND の功績により、非常に大きな国際的な支持が育ち、国連総会におい

て、125 カ国以上が核兵器禁止条約（NWC） に対して支持票を入れると考えられています。

また、列国議会同盟（IPU）には 150 以上の議会が参加していますが、ここでも CTBT の普遍的な批准を求める決議が採択されました。また、国連の潘基文事務総長が掲げている核軍縮の「5 つの行動計画」を促進することも決議されています。すなわち、核保有量の削減、非核兵器地帯を作ること、核分裂性物質条約に向けた交渉を始めることなどです。そして、数日前、広島で潘基文事務総長が改めて核兵器禁止条約の重要性を述べています。

PNND は、去年の 11 月にコスタリカのアリアス大統領が、国連憲章第 26 条の実施を提唱したことを支持しています。第 26 条は、軍備規制を定めたもので、人的・経済的資源を、世界が必要とするものから軍事的使用に流れないようにするものです。このコスタリカン・コンセンサスは、ラテンアメリカと世界の共同行動のベースになると思います。特に世界的な経済危機の最中であっては重要なものだと思います。

PNND と平和市長会議も核兵器産業から国連開発目標の実現のための資源再配分ということを謳っています。去年の 9 月、PNND のメンバーである河野洋平衆議院議長さんが広島で G8 下院議長会議を開きましたが、これは非常に画期的なものでした。この会議では G8 各国の下院議長が原爆の犠牲者を追悼し、核廃絶に対する新たな決意が示されましたが、広島の平和公園に初めてアメリカの高官が訪れたのです。アメリカのナンシー・ペロシ下院議長が参加したことが、オバマ大統領のプラハ演説につながったのではないかと思います。オバマ大統領は、アメリカが日本に対して核兵器を使ったことに基づいて、アメリカの核軍縮に向けての道義的責任を初めて認めたということです。

このスピーチは、色々なところで讃えられましたが、北朝鮮の核実験が暗い影を投げ掛けました。この核実験の影響の大きさにはここでは触れません。国連の潘基文事務総長が、改めて北朝鮮に対して 6 カ国協議への参加を呼び掛けていることに言及しておきます。

しかしながら、6 カ国協議が北朝鮮の核開発を止められなかったことを踏まえ、北東アジア非核兵器地帯を作るべきではないかという考えに賛同が広がっています。これは中村桂子さんも今朝仰っていましたが、それは核兵器保有国が法的な拘束力のある約束をすることを意味します。つまり、非核兵器地帯にある国に対して、核兵器保有国は核兵器を使うことができないということです。

なぜ北朝鮮が NPT からの脱退を表明し、核実験をしたかといいますと、攻撃されないという確証がないからです。6 カ国協議は、北朝鮮に対して、核開発計画の放棄を求めています。韓国や日本に対して核抑止力への依存を減らすことは要求していません。しかし、非核兵器地帯というのは、核保有国及び北朝鮮、韓国、日本の全てに対して核抑止力の拡大を制限するものであり、現在、北朝鮮が一方向的に制限を要求されているような状態ですので、より平等なものであり、おそらくこれは北朝鮮にとっても受け入れ易いものではないかと思います。

われわれは、もちろん 2020 年までに核廃絶を実現できると思いますが、そのためには強力な行動を取っていかなければなりません。その一つの証拠として、平和市長会議と PNND

が、平和と非暴力のための平和行進を支持しています。平和行進は、今週、広島で核廃絶のための松明の点灯を行いました、それから世界を回ることになっています。この炎は、インターネットでどこにでも広げることができますので、2010年のNPT再検討会議にも届けられると思います。ニュージーランドでは10月2日にウェリントンから行進が始まり、平和公園を歩いて行きます。この行進はやがて長崎にも来るとと思いますが、その時には、長崎の原爆を生き延びたクスノキの挿し木から育った木を参加者の皆様に示すことができると思います。

平和行進が長崎を通る時、おそらく皆様に「平和のマント」という彫刻をご覧いただけるとと思います。これは、われわれの平和への固い信念を示すニュージーランドからの贈り物です。

平和行進については、Facebook、Myspace、Twitterなど多くのブログでご覧になれると思います。このサイトは、日本語を含め26カ国語になっています。

フランスからの友人が、今、キャンペーンを始めたということです。平和の担い手という別の行進もあるということです。合流してつながっていくこともできるでしょう。

今から2カ月足らずの間に世界の行進が始まり、93日間続きますが、それは正に多様な人類が核軍縮という目標に向けて行動を起こすということです。戦争へとつながる様々な形での暴力に終止符を打つのです。どこまで活動を続けられるか、どこまで平和に満ちていられるか限界に挑戦することで、明日が確実に迎えられるのだと思います。

最後に日本語で「どうもありがとうございます」。(拍手)

**ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド) :**

(即興の歌)

**議長 (ドナルド・L・プラスケリック アクロン市長・アメリカ) :**

ハーヴェイさんに即興の歌をご披露いただきました。われわれにとって重要なメッセージが入っていたのだと思いますが、私はちょっと聞き逃してしまいました。

セッションをまとめますと、ハーヴェイ市長、デハネ市長に全体会議と分科会の報告をしていただきました。全ての発言者の方、この会議を主催して下さった田上市長、努力して下さったスタッフの方々に感謝したいと思います。また、田上市長と秋葉市長のリーダーシップの下、平和市長会議は近年、素晴らしい発展を遂げています。われわれのように、最近、平和市長会議の活動に携わり始めた多くの市長たちのために、両市長には多大なご尽力をいただきました。

このセッションでは、それぞれの経験を共有し、対話を続けることをここで宣言し、約束しました。そして、ほとんどの発言者が挙げていましたように、特に若い人たちに向けての教育が非常に重要だということが共通していたと思います。

長崎の式典の中で大変記憶に残ったことは、被爆者の話でした。1945年に9歳で被爆し

た女性のお話でしたが、それぞれの国での戦争体験を思い起こし、なぜこういったメッセージが重要なのかということも、それに重ね合わせて理解することができると思います。つまり、1945年8月に起こった被爆者の経験をそれぞれが聞くことによって、誰もが想像の中で経験していくのです。皆が被爆者の話を直接聞いたり、現地を実際に訪れ、記念碑や写真を見られるわけではありませんが、この想像を絶する悲劇を自らの似たような体験を通して伝えていくことが重要です。こういったメッセージをこれからも伝えていき、将来、二度とこういうことが起こらないようにしていきたいと考えています。

多くの発言者から、それぞれの地域で行われている活動の紹介がありました。コ克蘭さんからは、他の市長も含めて組織化するという事、ルイさんからは、市長のリーダーシップが重要であるというコメントがありました。また、アメリカではお互いの意見を聞き、意見を構築していくことが重要で、それを市長が届けなければならないのです。ですから、平和市長会議の役割は非常に重要だと思います。ブルンジの大使とゴメスさんからは、政府の支出を見ると、色々なところに無駄があり、その方向を変えていくことが重要だというコメントがありました。例えば、兵器に使われている経費を人類が必要としているところに使うことがとても重要だということです。特に、困窮している地域のために使うべきです。軍事に向ける経費、資源を人類にとってより良い使い方に切り換えることが重要だと思います。

共通のテーマとして出てきたのは、他者をつながり協力しあって理解を深めていくことが重要であるというメッセージです。そして、二度とここで起きたことと同じことを起こしてはいけないということです。

皆様、全体会議Ⅱにご出席いただきまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。(拍手)